

創業者・初代理事長の命日に幹部とともに墓参しました

医療法人社団 健育会 理事長 竹川 節男



健育会グループの創業者・竹川不二男の命日である3月8日、静岡県富士宮市にある法華本門寺根源に伺い、住職に読経をいただきました。毎年3月に墓参していますが、昨年は新型コロナウイルス感染の影響によって叶わず、2年ぶりの訪問となりました。今回はわたしの中にある父の記憶をたどりながら、思いをお話しようと思います。



わたしの父であり、健育会初代理事長の竹川不二男は、富士山の麓にある静岡県・富士宮市に眠っています。彼はこの地で生まれ、板橋区の旧制中学（現・東京都立北園高校）に通うまでの日々を過ごしました。学生時代の成績は優秀で、とある人に勧められたことから医師になることを決意。父親が夭逝し、当時は裕福な家庭ではありませんでしたが、静岡県の徳川家財団の奨学金を受けながら、東京医学専門学校（現・東京医科大学）に通いました。勉強好きで、卒業後も研究の道に進みたかったそうですが、家計の状況を鑑みて1953（昭和28）年、板橋区に診療所を開業。これがのちの竹川病院となる、健育会の原点です。



開院当時の竹川病院（診療所）

当時、親族に医師はいませんでした。その後は竹川家から多くの医師を生み出すきっかけにもなりました。



診療所は自宅の敷地内にあり、幼少期のわたしにとっては生活の一部でした。地下鉄のない時代、国道17号線沿いにあった診療所には、日々、交通事故の患者が搬送されてきました。急患や近所の方への対応に追われ、食事もままならず診療にあたる父の姿が記憶に残っています。

やがて交通の発展や高齢化など時代は変わり、リハビリの必要性を感じた父は「熱川病院」を創立。「治す」にとどまらず「ケアをして社会に戻す」ことを使命としたのです。人材不足のなか、その後も2つの病院を開設し、一人で切り盛りする彼の側で、末っ子のわたしはいつも話を聞いていました。大人になってからも変わらずたくさんのお話を交わした父。“教師”であり、同時に“反面教師”でした。

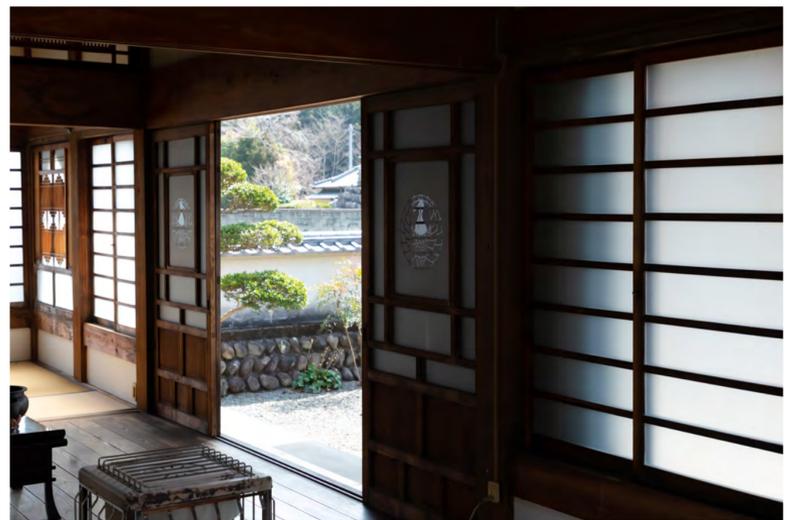
忙しく働く父を見ていたわたしは、ひとつの考えに至ります。人の命を救い、ケアしながら複数の施設を運営するには“仕組み”が必要である――。現在の健育会の経営体制には、そのような背景がありました。医療にも経営は必要です。医師としての手腕を発揮しながらも、父は情に厚すぎる人間でした。優しく、失敗したスタッフに対してもチャンスを与えましたが、経営者としてはネックにもなりかねません。しかしながら、近年、わたしもその思いが理解できるようになった気もしています。



3月8日は天候に恵まれ、境内では梅が春の訪れを告げていました。午前にはスタッフを中心にお墓を清掃。このお墓は父が生まれた地に、と兄とともに建てたものです。晴れた日には富士山を望むことができます。



その後、西之坊に移動して住職にお経を上げていただきました。状況を加味して、換気を徹底。万全な感染対策のもと行いました。



読経後には墓前に参り、父に事業の報告をいたしました。治療して病気を治すだけでは全ての人が幸せにならない、その考えからいち早くリハビリの大切さに気づき、行動に移した先代。その精神は現在も、健育会に受け継がれて生き続けています。



創立者・竹川不二男先生

余談ですが「不二男」は、富士山のもとで生まれたにも関わらず「不二」の漢字を受けています。これは仏教が由来だそうです。「駿河には過ぎたるものが二つあり 富士のお山に原の白隠」——沼津で富士山と並んで称される禅僧・白隠の教えに通ずる「不二」。「相反するものを突き詰めると同じものである」といった意味です。医療と経営も同様。一見、混じり合えないものも同じ土台で考えなくてはなりません。父の受けた名が息子であるわたしの経営哲学につながることに、改めて感じ入る一日となりました。